

「カラマーゾフの兄弟」演出雑記

中野 誠也

初演は、1994年11月千田是也の演出でした。チエーホフ、ゴリキー、またプレヒトを中心に手掛けてきた千田先生が、宗教色の濃いドストエフスキーを最後の演出として初めて取り上げたのは何か象徴的意味を持つように思われ、以来、「カラマーゾフの兄弟」は私たちにとって忘れられない意味深い作品となっております。

この作品は湯浅芳子賞を受賞されました。その舞台で僕は長兄ドミートリーを演じさせていただきました、でもまさか、自分が演出するなんて思いもありませんでしたが、「カラマーゾフ」に惹かれて身の程も知らずに挑戦することになりました。

ドストエフスキーは時代の曲がり角になると必ず

読み返されると謂われていますが、大震災以後、世界は曲がり角どころではなく、一変してしまつたようです。「カラマーゾフの兄弟」が書かれた1870年代のロシアも皇帝暗殺未遂事件が相次ぐ混乱期だった。その混乱期、人間とは何か、神とは何か、自身は不信仰と懷疑の人としつつ、人間の精神の根源を書いたドストエフスキーの云うロシア的、土俗的大地信仰について、アリョーシャが歓喜のうちに涙を流しながら接吻するあの大地について、ラスコーリニコフがソーニャに促されて接吻する大地について、ロシア人には一種独特な精神病があると云う。大地の広さに疲れ果てた農民が、突然、鋤鍬を投げ捨て歩き始め、大地の果てを探し求めてついに行き倒れ

になると云うのだ。その広漠たる大地の世界で己を失う恐怖から、すべてのロシア的なもの、アナキズムも、同時に、烈しい宗教的渴望も生まれるのだと云う。

この行き着くところまで行くと云う極端に走る民族的性癖は、その歴史に見られる所であるけれど、カラマゾフの兄弟たちにもそれぞれの形で体现されていると思われる。好色無頼の父親フョードル・カラマゾフ、激情の熱血漢ドミトリー、ニヒリストのイワン、心優しいキリスト者アリョーシャ、私生児スメルジャ・コフ、そのエネルギーは善悪を超えて流れ行く命のカオスだ。終幕、アリョーシャを開んで少年たちが叫ぶ「カラマゾフ万歳！」は、この命のカオスに対してである。「俺は虫けら同然の男だが、生きたい、どうしても生きたい。」と云うドミトリー、「俺には春になると萌え出でる木の葉が貴重なのだ。」と云うイワン、好色無頼なフョードルの命に対してでもある。ドストエフスキーが予告して

いた小説の二部で、その壮大な命はどのように流れ行くのであろうか。

八木さんは、アリョーシャは13年後革命家となり、皇帝暗殺首謀者として処刑されることになるだろうと云うドストエフスキーの予告どおり、アリョーシャの銃殺シーンを入れている。どのようにして親殺しは皇帝殺しに繋がっていくのか。すべての罪は最終的にアリョーシャに集約されていくと云う。亀山郁夫氏は、ドストエフスキーは混沌を克服する道を革命か神かの二者択一として提示しながら、それをも、相対化しながら、親殺しと云うリズムを通して、ロシアと世界を覗きこもうとしていた、と述べている。

原発安全神話の崩壊、地球環境破壊が進む中、ドストエフスキーの問いかけはより深くなるばかりに思える。

この戯曲を我々に残した下さった八木さんに深く感謝している。

(2011/12/11記)